

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：23804

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K12267

研究課題名（和文）ヴァレール・ノヴァリナの俳優術におけるアール・ブリュットの受容と展開

研究課題名（英文）The Reception and Development of Art Brut in the Acting Technique of Valere Novarina

研究代表者

井上 由里子 (Inoue, Yuriko)

静岡文化芸術大学・文化政策学部・准教授

研究者番号：70601037

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：ノヴァリナとデュビュッフェの影響関係を探り、ノヴァリナの俳優論におけるアール・ブリュットの受容と展開について考察した。その結果、従来ノヴァリナのアール・ブリュット受容は劇作術にとどまると考えられてきたが、俳優論においてもアール・ブリュットが摂取されていること、理想の俳優像をコール・ブリュットと呼ぶことができることを示した。また1990年後半のビュシュヴァルト演出における俳優の演技にその理論の展開が見られること、障害のある身体がコール・ブリュットという理想を実現しうることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究成果の第一の意義は、コール・ブリュットという新概念と障害者演劇におけるその展開を解明することにより、従来のアール・ブリュットが作者の生きた身体を置きざりにしてきた傾向を顕在化させ、障害のある身体が芸術的にも社会的にも新しい可能性を拓くことを示した点にある。また学際的研究を通して、まだ日本で知られていないフランスの障害者演劇の実態を示すとともに、暗黒舞踏と障害のある身体との接点という新しい視点を提示した。さらにノヴァリナの俳優の演技において言葉と人間の関係が反転することを指摘し、ノヴァリナの言語の演劇性を示したが、この指摘には単なる言語実験と批判される作家像を修正する意義があると思われる。

研究成果の概要（英文）：This study examined the relationship between Novarina and Dubuffet and explored the reception and development of Art Brut in Novarina's theory and stage. Although it has been thought that Novarina's acceptance of Art Brut was limited to his playwriting, Art Brut was absorbed in his theory of the actor as well, and his ideal image of an actor can be called "Corps Brut". The development of this theory can be seen in the actor's performance in Buchvald's production of the late 1990s, and it was shown that persons with disabilities can realize the ideal of "Corps Brut".

研究分野：演劇学

キーワード：ヴァレール・ノヴァリナ アール・ブリュット フランス20世紀演劇 障害 俳優論 ケア 蜂鳥劇団 暗黒舞踏

1. 研究開始当初の背景

日本における20世紀フランス演劇研究において、シュルレアリスムや不条理演劇については多くの研究の蓄積が存在するが、両者の流れを汲むフランスの劇作家、演出家、演劇理論家、画家であるヴァレール・ノヴァリナ (Valère Novarina, 1942-) については、その独自性と重要性にもかかわらず、ほとんど研究されていない。フランス語圏では活発な研究が行われており、言語の破壊と再創造からなるノヴァリナの劇作術が解明されつつある。しかし、いずれもテキストに沈潜する文学研究であり、新しい言語が俳優の心身に働きかけるというノヴァリナの構想する演劇はまだ解明されていない。そこで、筆者は博士論文において、上演を視野に入れてテキストを再考し、ノヴァリナのテキストがある種の俳優術を内包することを示した。ノヴァリナの言語の演劇的質を析出したわけであるが、生きた身体を対象とする俳優術の研究は緒に就いたばかりである。

ノヴァリナの俳優術を考える鍵となるのは、アール・ブリュットとの関係である。芸術的教養の埒外にある「生(き)の芸術」を意味するこの芸術理論からノヴァリナが強い影響を受けたことはすでに明らかにされているが、先行研究は戯曲テキストへの影響を分析するにとどまり、俳優術への影響を看過してきた。しかし、ノヴァリナの初期の俳優論「ルイ・ド・フュネスのために」(« Pour Louis de Funès », 1986) にもアール・ブリュットの理論が摂取されている。また、2012年には、知的障害のある職業俳優からなる蜂鳥劇団 (Compagnie de l'Oiseau-Mouche, 1981-) がノヴァリナのテキストを上演し高い評価を受けている。他方、障害者の芸術活動への関心が高まりを見せる近年の日本では、造形作品が芸術的評価を受けても作り手本人に興味を持たれないという問題が存在する。これは、アール・ブリュットをめぐる言説・研究の関心から生きた身体が置き去りにされている状況とも無関係ではないと考えられる。こうした状況をふまえて、ノヴァリナの俳優術におけるアール・ブリュットの受容と展開について理論と実践の両面から考察する必要があると考え、本研究を開始した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ヴァレール・ノヴァリナの俳優術におけるアール・ブリュットの受容と展開を明らかにすることである。具体的には、以下3点を目的とする。

- (1) アール・ブリュットの創唱者である画家ジャン・デュビュッフエ (Jean Dubuffet, 1901-1985) とノヴァリナの関係性を把握する。
- (2) アール・ブリュットの理論がノヴァリナの俳優論にどのように受容されたかを明らかにする。
- (3) アール・ブリュット理論を摂取したノヴァリナの俳優論が俳優の生きた身体においてどのような展開を見せるかを明らかにする。

3. 研究の方法

上記3点の目的を達成するために、それぞれ次の方法に基づいて研究を進める。

- (1) 1970年代から80年代にかけてノヴァリナとデュビュッフエの間で交わされた書簡を収めた『誰も何の内にもない』(*Personne n'est à l'intérieur de rien*) を精読した上で、ノヴァリナ自身にインタビューを行い、ノヴァリナとデュビュッフエの関係性を把握する。
- (2) デュビュッフエの全集 (*Prospectus et tous écrits suivants*) とノヴァリナの俳優論「ルイ・ド・フュネスのために」を比較し、ノヴァリナの俳優論におけるアール・ブリュットの受容のあり方を考察する。
- (3) ノヴァリナのテキスト上演に関わった演出家や俳優への聞き取り調査のほか、蜂鳥劇団をはじめとする日仏における知的・精神障害者の演劇に関する調査を行う。これらの俳優達の演技の実態を把握した上で、演劇におけるアール・ブリュットの展開を探る。

4. 研究成果

(1) ノヴァリナとデュビュッフエの関係性の把握

1978年、駆け出しの劇作家であったノヴァリナは、人生の晩期にさしかかった画家デュビュッフエに、第二作『危険階級のおしゃべり』(*Le Babil des classes dangereuses*) を送り、以来デュビュッフエが逝去する1985年まで、約7年にわたり二人の交流はつづいた。おもに手紙を介してのつきあいであったが、1982年、ノヴァリナが一日中絵を描き続けるパフォーマンスで生み出した約二千枚のデッサンをデュビュッフエに捧げ、デュビュッフエはそれを「前代未聞」のものと称賛してアール・ブリュットのコレクションに収蔵した。1984年、第五作の『生の劇』(*Le*

Drame de la vie) がついに P.O.L 社から出版された際にも、デュビュッフエはノヴァリナの依頼に応じて序文を捧げている。

初期のノヴァリナは苛烈なまでの言語創造を行なっていたため、テキストは上演不可能とみなされていた。不遇の日々を過ごすノヴァリナにとって、デュビュッフエのこうした励ましは重要な意味を持ったことは想像に難くない。実際、2018年8月にノヴァリナに行ったインタビューにおいても、ノヴァリナは「師のひとり」であるデュビュッフエに対して謝意を表していた。

(2) ノヴァリナの俳優論におけるアール・ブリュットの受容

ノヴァリナの重要な俳優論は二つある。1974年発表の「俳優たちへの手紙」(Lettre aux acteurs) と1985年発表の「ルイ・ド・フネスのために」(Pour Louis de Funès) である。前者はデュビュッフエとの交流前に書かれ、後者はデュビュッフエの没年に発表されているため、両者を比較することでノヴァリナとアール・ブリュットとの親近性を浮き彫りにできると考えられる。

両者に共通するのは、ノヴァリナが理想とする演劇像である。ノヴァリナが影響を受けた思想家は数多くいるが、なかでもフランスの思想家ジョルジュ・バタイユの「供儀」(sacrifice) を軸に、現実社会が「創り出し、保存する世界(持続性のある現実の利益となるように創り出す世界)」であるのに対して、演劇は「将来を目ざして行われる生産のアンチ・テーゼ」として構想されている(『宗教の理論』)。そこで俳優は、現実の「秩序だった市民的身体」や「お仕着せの身体」と呼ばれる「第一の身体」を解体し、もうひとつ別の身体を見つけることになる。

両者の相違点は複数見出すことができるが、俳優に焦点を絞ると、「供儀」に至るための道に変化が生じている。1974年には、俳優が生産性や利益を度外視して身体を「消尽」することが必要とされる。その際、おそらくはアントナン・アルトーからの影響ゆえに、身体内部の物質的なものの衝動が重視されている。他方、1985年には、俳優が身体から離脱するための新しい契機として、自己の「贈与」「放棄」、すなわち「無(vide)」が現れる。

俳優による「無」の実践はキリスト教神学と無関係ではない。神の身分を捨てたキリストがあえて貧しい人間イエスとなり、十字架の死を受けて無になったという「ケノーシス」の概念をふまえたものである。神学的問題は、1980年代以降のノヴァリナの劇作品にも前傾化してくるため、ノヴァリナ研究における重要な課題であるが、本研究の射程外であるため、ここではアール・ブリュットの争点である芸術教育への言及に注目した。すると「国立無学校」という逆説的な表現によって端的に示されるように、芸術的教養を否定するアール・ブリュットに通じる態度が見られる。このとき俳優とは「何も学習することがない職業」であり、俳優の条件は何もできないこと、「無能」であることとなる。言い換えれば、さまざまな技や規範を身につけた人が俳優になるのではなく、既成の演技を捨てた人から新しい何かが生まれるまさにその瞬間に俳優が誕生する。つまり、俳優とは「無化された動物」、一切を放棄してただ自身の身体が学んだことだけを知るもの、既成の言語によって加工されていない身体である。その意味で、ノヴァリナの理想の俳優は、アール・ブリュットとエクリ・ブリュットに倣って、「コール・ブリュット」(corps brut=生の身体)と呼ぶことができるだろう。

1945年頃にデュビュッフエが提唱したアール・ブリュット概念は、「芸術的教養の影響を免れた人たちが」「すべて(主題、材料の選択、作品化の手段、リズム、表現法等)を伝統的芸術のありきたりの型からではなく、自分自身のなかの奥深い場所から引き出す」ことにより生まれるものであった。その狙いは、正規の美術教育を受けていない作り手——精神的・知的障害者、霊媒師、独居老人、主婦など——の作品を芸術とみなし、従来の美的判断基準を問い直すことにあると考えられる。それに対して、1985年にノヴァリナが理想とする「コール・ブリュット」とは、既成の芸術的教養の影響から免れているだけではなく、先述したように、身体に内在化された社会的秩序が除去されたものである。フーコーの言葉を借りれば、近代社会における自己規律化した「従順な身体」から「生権力」の影響をいかに取り去るかという課題をノヴァリナは引き受けている(『監獄の誕生：監視と処罰』1975年)。

(3) 俳優の演技におけるノヴァリナの俳優論の展開

① 舞台上で反転される人間と言葉の関係

ノヴァリナのテキストは、古語や地方言語、外国語、造語などの多彩なレジスターからなる。その上、長大なモノローグを割り振られた登場人物もいれば、コロスの役割を担う登場人物もいる。出演俳優の背景も様々であり、演技法は定まっていない。ただし、テキストの意味より音声が優先されるなど、俳優が言葉に対して受動的になる傾向がある。

たとえば、アンドレ・マルコン(André Marcon)の一人芝居『動物たちへの言説』(1986)では、身体が言葉によって操られるような神秘的演技が観客を魅了した。長大なモノローグが俳優の心身を追い詰めることもある。『架空のオペレッタ』(1998)や『激昂空間』(2006)のダニエル・ズニック(Daniel Znyk)、『舞台』(2003)のドミニク・パラン(Dominique Parent)の狂気的な演技がそれである。また、1990年代後半、ノヴァリナのテキストの喜劇性を舞台に引き出してみせた演出家クロード・ビュシュヴァルトの上演において、俳優達は矛盾に満ちたノヴァリナ

のテキストを文字どおりに動くことで、紋切り型を廃した「愉快的身体」を手に入れた。

ノヴァリナは言語観について語った理論的テキストにおいて、言葉が人間の道具であるという通念を批判し、言葉を情報伝達のための道具とみなすメディアの傲慢を戒めているが、こうした演技においては、人間と言葉の関係の反転が実際に起こっている。ノヴァリナのあり得たかもしれない言語に俳優が従うとき、その身体からは予想外の動きや素っ頓狂な声生まれ、よそ行きの顔が徐々に壊れていく。近代に創られた国語から逃れた身体という意味では、コール・ブリュットの一つのあり方とみなすことができる。また、ノヴァリナの劇作術にまで大きな影響を与えたビュシュヴァルト演出では俳優達の多くが素人俳優であったことを考えると、ノヴァリナの俳優論は90年代後半のビュシュヴァルト演出作品に展開されていると言える。素人俳優の起用という通常の演劇においては困難な条件になる要素が、ノヴァリナのテキストの演技には有利に働いているのは特筆すべきことである。ただし、俳優達は必ずしも芸術的教養から免れているわけではない。特に、2011年オデオン座で大きな成功を収めた『架空のオペレッタ』(2009年初演、ノヴァリナ演出)に出演したハンガリーのチョコナイ国立劇場の俳優達を見るかぎり、歌やダンス、アクロバティックな動きなど、前表現性を高める身体訓練は有効である。ノヴァリナの劇作術の変化に伴い、理想の俳優像が変化した可能性があると考えられるが、それは本研究の射程外であるため今後の課題としたい。

② ノヴァリナと障害のある身体：蜂鳥劇団『ことばから出る』(Sortir du corps, 2012) をめぐって

蜂鳥劇団(Compagnie de l'Oiseau-Mouche)は、知的障害のある職業俳優からなるフランス初の劇団である。2012年、ノヴァリナのテキストをコラージュした『ことばから出る』Sortir du corpsを演出家はセドリック・オラン(Cédric Orain)のもとで5人の俳優が演じ、パリで再演されるほどの成功を収めた。批評家の関心を集めるだけでなく、ノヴァリナ本人の賞賛も受けている。

蜂鳥劇団の拠点があるのは、アートによる町おこしで知られる、フランス北部の都市ルーベである。1978年に俳優・演出家のエルヴェ=リュック Hervé-Luc が自動車修理工場を改装してマイムの学校をつくり、知的障害者のためのクラスを開設した。1981年にはこの学校が、芸術に関わるESAT(労働支援機関・サービス: Établissements ou Services d'Aide par le Travail)として国内初の認可を受け、プロの劇団になる。法的には医療・社会福祉機関であり、特殊教育士(éducateur spécialisé)という国家資格をもつスタッフが常駐する。俳優のスケジュール管理から稽古の補習、本番前の緊張緩和まで、こまやかにケアを行う頼もしい存在である。劇団員としては全国から集まった約20人の俳優が所属し、寮に暮らす。専属の演出家はおらず、外部のアーティスト(演出家、振付家、サーカス団員、造形作家、映像作家など)を招いてワークショップを行う形をとっている。俳優がアーティストの多彩な技法を学ぶ一方で、アーティストもまた俳優の予想外の反応から刺激を受けることができる。ワークショップは作品創作の場であると同時に、俳優訓練と芸術的交流の場としても機能している。

『ことばは出る』もまたワークショップ形式で創作された。演出家のオランは、約8ヶ月の準備期間と約2ヶ月の稽古を通じて、それぞれの俳優に合うノヴァリナの言語の種類を見極めた上で台詞を割り振っていった。傑出した記憶力に恵まれた俳優には、ノヴァリナの演劇テキスト『架空のオペレッタ』の「無限の小説家(Infini romancier)」と呼ばれる長大なモノローグが与えられている。こうしてオランは俳優達を指導ないし誘導しているわけであるが、彼らの演技からは演出家にさえ予想できなかったものが生まれたという。たとえば、ノヴァリナのテキストは通常のリズムや音響が乱されているので発音することが難しいが、言葉を発することに困難を覚える俳優によって語られると、いっそう強度を高めた。複数の劇評は、俳優の演技が言葉の強度と「予期せぬもの、謎めいたもの、人間的なもの」をもたらしたと高く評価している。

このように、蜂鳥劇団の『ことばは出る』においては、社会において心身機能の障害として否定的に捉えられる性質が、舞台上では個性として活かされ、演出家の意図を越えた効果を生み出している。障害のある身体は、近代社会において規律化できない非生産的な身体として社会の外部に排除される傾向にあったが、ノヴァリナの俳優論に照らしてみれば、規律化から免れることができる身体である。

1984年から活動を続けるフランスの障害者劇団アトリエ・カタリズ Atelier Catalyse もまた、偏見にとらわれず、つねに俳優の可能性を拓く演劇活動を行う。『不思議の国のアリス』やカフカの小説など、戯曲ではない文学テキストも上演し、最新作『ガリヴァー、最後の旅行』Guliver, le dernier voyage はスウィフトの諷刺文学『ガリヴァー旅行記』の第3篇を素材にしている。これまで舞台化のための加筆修正はすべて劇作家が担当していたが、今回は俳優が書くことに挑戦した。アヴィニョン演劇祭の常連であり、2021年にはフランス初の国立適応創造センター Centre national pour la création adaptée となった。ブルターニュのモルレにある劇場は、俳優7人の小劇団で、俳優のひとり所属28年目となる。演出のマドレーヌ・ルアーン Madeleine Louarn はもともと特殊教育士で、演劇にははずぶの素人だった。1984年、22歳のときにモルレのESATでアマチュアの演劇工房を開いたのを機に実地で演出を学びはじめ、10年でプロになった。創作に携わる芸術集団(演出家、美術家、音楽家、振付家など)は3年毎に編成され、この3年間、全員が集合住居で生活を共にしている。芸術と生活が一体になるおかげで、信頼関係で結ばれた

共同体が生まれ、俳優はゆったりと創作に取り組むことができる。精神科医フランソワ・トスケルなどが実践した「制度による精神医療」からの影響がある。

蜂鳥劇団とアトリエ・カタリーズというフランスの代表的な障害者演劇の創作過程を見ると、特殊教育士の存在が大きいことがわかる。これは、「自身の固有の衝動を唯一の起点」とする「まったく純粋で生のままの芸術的遂行」であると定義されたアール・ブリュットとは大きく異なる特徴である。個人で創作する造形芸術の場合でも施設職員などのサポートを受けることはすでに知られているが、創作過程が複雑な舞台芸術においては一層の他者の協力が必要である。ただし、蜂鳥劇団とアトリエ・カタリーズのいずれの場合も、俳優の心身の状態に合わせて仕事のリズムを決め、俳優の個性を引き出すことを重視するなど、弱さを中心にした集団創造が行われている。

③ 暗黒舞踏と障害のある身体：中嶋夏〈心と身体の学級〉(1993-)をめぐって

蜂鳥劇団を創設した1970年代末、障害者が舞台に立つことは観客にも保護者にもまだ理解不可能という状況であったが、演出家エルヴェ＝リュックは、同時期にフランスで注目を集めた日本の暗黒舞踏のおかげでダウン症の俳優の演技が受容される素地ができたと述べている。実際、暗黒舞踏は障害のある身体をひとつの理想としている。暗黒舞踏の創始者である土方巽(1928-1986)は、舞踊の型として動植物や神仏、芸術家、妖怪、古い、病に加えて、障害のある身体を重視している(「不能者のステップ」「分裂病の少女」「狂人」等)。土方の指導を受けた小林嵯峨も「障害や病を抱えて社会の一番下に置かれている者の肉体的性が暗黒舞踏には不可欠である」と述べる。

暗黒舞踏において、障害のある身体は規律化から免れることが「できる」身体とみなされると言える。土方とノヴァリナの間に直接的影響関係は存在しないが、土方は「体制化された身体の着衣」を剥ぎ取ることを目指しており、ノヴァリナのコール・ブリュットと共通する課題を持っている。さらに、土方の弟子である中嶋夏(1943-)が暗黒舞踏の手法を知的障害者との踊りに活用している〈心と身体の学級〉では、見たことのない踊りが誕生する瞬間に立ち会うことができる。その意味で、中嶋夏の学級では、ノヴァリナの演劇以上にコール・ブリュットが実践されている。

毎月2回、2時間ずつ開催される〈心と身体の学級〉は、「健康と身体」「遊びとグループ・ワーク」「自由即興ダンス表現」という3つの軸からなり、それぞれが切れ目なく有機的に展開する。まず、近代的体操のように筋力強化や呼吸のコントロールを行うのではなく、身体をゆるめる体操を参加者全員で行う。号令ではなくオノマトペに合わせて動くため、体操というより遊びである。次に、音楽に合わせて歩き、他の参加者に触れ、ぬくもりを感じる。そして、オブジェとともに即興ダンスを踊る。中嶋によれば、暗黒舞踏においては、まず日常の「社会制度を帯びた身体」があり、次にそれが「何でもなくなる」状態、つまり「無名の身体」「素の身体」「モノになった身体」になり、そして「何かになる」「憑依される」という。この形式をもとに〈心と身体の学級〉を考えると、オノマトペとオブジェが重要な役割を果たしているのがわかる。体操のオノマトペによって、子どもの身体(「ごによごによ」「ぞ～うさん」等)や、モノになった身体(「ズドーン」「ウィーン」等)、夢見る身体(「ぐ～ぐ～す～やす～やむ～にやむ～にやむ」等)になる。言葉の音とイメージを通して日常の「社会制度を帯びた身体」が「素の身体」に戻ることが助ける。オブジェについては、例えば「ゴミ袋」は掃除用品という人間の「道具」であるが、ゴミ袋と踊る参加者はオブジェの形や色、大きさ、手触り、音、光、可塑性、速度など、「素材」の様々な特徴を味わうことになる。つまり、道具から日常の有用性が取り去られ素材になるという意味で、オブジェは「何でもなくなる」。そして、参加者の想像力によって見立てが行われると、楽器や未知の生物(袋星人)のような「何かになる」。

最終的に、自分だけの動きが繰り返されることを目的としているが、それは意図的に生み出されるわけでも、指導者の指示や決まった型の学習から出てくるわけではない。重要なのは、オノマトペや音楽に耳を澄ますこと、オブジェの素材を感じることで、また、常識や先入観を捨てて子供のような想像力を発揮して遊び、夢見ることである。人間が道具を使用するのではなく、道具に対して受け身になり、道具と自由に遊ぶことは、ノヴァリナという言葉に対して身を委ね、言葉と戯れたビュッシュヴァルトの俳優の演技と通じるものがある。

2022年に勤務先の静岡文化芸術大学において特別に開催した〈心と身体の学級〉では、障害のある参加者が色々な音や動きを繰り返すのに対して、優等生が「正解を探してしまって、前の人と同じ動きしかできない」と当惑する場面があった。〈心と身体の学級〉は、正解を学習して自立する力の獲得を目指す教育ではなく、正解が存在しないときに多様な人々と協働して新しいものを発想し創造する力を養う教育の可能性を提示している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 井上由里子	4. 巻 2022年10月号
2. 論文標題 ピーター・ブルックと現代演劇	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ふらんす	6. 最初と最後の頁 54-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井上由里子	4. 巻 2022年11月号
2. 論文標題 蜜蜂とともに	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ふらんす	6. 最初と最後の頁 54-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井上由里子	4. 巻 2022年12月号
2. 論文標題 取材からはじまる演劇創作	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ふらんす	6. 最初と最後の頁 54-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井上由里子	4. 巻 2023年1月号
2. 論文標題 俳優の個性に照らされて	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ふらんす	6. 最初と最後の頁 54-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井上由里子	4. 巻 2023年2月号
2. 論文標題 夢かうつつか：ポムラとピィの童話劇	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ふらんす	6. 最初と最後の頁 54-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井上由里子	4. 巻 2023年3月号
2. 論文標題 作者はだあれ：モリエール生誕400年の『守銭奴』	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ふらんす	6. 最初と最後の頁 54-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 井上由里子
2. 発表標題 La Republique des traducteurs 2
3. 学会等名 Atelier de la pensee autour des traducteurs de Valere Novarina (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 井上由里子
2. 発表標題 Jouer avec la langue novarinienne : autour des deux aspects specifiques au japonais
3. 学会等名 "Valere Novarina : les quatre sens de l'ecriture", Centre culturel international de Cerisy (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 井上由里子
2. 発表標題 ダンスが生まれるときー中嶋夏 心と身体の学級 をめぐって
3. 学会等名 日本演劇学会分科会 近現代演劇研究会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Yuriko Inoue (Co-author)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Hermann	5. 総ページ数 324
3. 書名 La Republique des traducteurs -- en traduisant Valere Novarina	

1. 著者名 Yuriko Inoue (Co-author)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Hermann	5. 総ページ数 454
3. 書名 Valere Novarina : les tourbillons de l'ecriture	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------

フランス	Universite de Lille 3	INALCO		
スイス	Universitat Zurich			